Sagrada Familia －聖家族－

サグラダ ファミリア

２０２５年１０月２６日号
発行：カトリック水戸教会 広報部

【希望の巡礼者】水戸教会 聖年の巡礼レポート

10月11日、聖年の巡礼指定教会：松が峰教会（栃木）と太田教会（群馬）を訪問しました。神父・神学生・シスター方を含む総勢36名、終日小雨の中、祈りかつ懇親を深めながら小さい旅を楽しみました。

松が峰教会では、大谷石造りの荘厳な聖堂で、主任の高橋神父様、水戸のルスニ神父様、ジュンジュン神父様の司式によりミサを捧げました。高橋神父様から松が峰教会の歴史、明治時代にカジヤック神父様によって拓かれた北関東の教会の歴史を聞きました。宣教師によって種を蒔かれ、時を刻んできた水戸教会の“兄弟教会”を訪れ、あらためて絆を感じ、感謝の念を深くしました。

太田教会では、ロザリオの祈り一環を捧げました。そこでは、多国籍教会（日本人信徒は約20%）として生きる教会の豊かさと難しさを知り、これから水戸教会がたどって行くだろう姿を想いました。ご当地弁当「トリ飯」でお腹と心を満たし、太田教会の皆さんの温かい“お接待”に感謝しつつ帰途につきました。

今回、この巡礼を準備し、実施してくださった方々に感謝します。教会の仲間とそろって出かけるのは、コロナ禍をはさんで何年ぶりでしょう。巡礼に参加できなかった皆さんのために、松が峰教会主任司祭高橋神父様のミサ説教（要約）をお願いして送っていただいたので、紹介いたします。　　広報部／○○○○

●ミサ説教要約 松が峰教会：高橋神父様

聖年は、旧約聖書のヨベルの年に起源を求めることができます。イスラエルにおいて、ヨベルの年は、貧しさのために土地を手放し、負債を抱え、隷属的な状態にある人々に対して、神さまのいつくしみを反映して、50年ごとに土地が返還され、負債が免除され、隷属的な状態から解放され、イスラエル人同士の貧富の差を解消するものでした。

カトリック教会では、このヨベルの年という旧約時代の精神を受け継いで、50年ごとの聖年（現在では25年ごと）を定め、償いの免除というゆるしと、巡礼を奨励してきました。今年2025年の聖年は「希望の巡礼者」という言葉で表されています。
この言葉は、私たちの人生そのものが希望の巡礼であるという意味を含んでいます。人間はもともと、神さまのところにいました。そして、この世を旅して、また神さまのところに帰ります。人の人生は、ロウソクにたとえることができます。暗闇に包まれた世界に希望の光をもたらし、冷え切った世界にあたたかさをもたらすことが、神さまが私たち人間に与えて下さっている、この世に生まれた意味と目的です。それは、この世界に希望とあたたかい心をもたらす巡礼であるとも表現できるでしょう。

ロウソクは、自身の体を燃やして、自身の命を削って、暗闇に光を与えます。そして、最後にロウソクは小さくなり、形が崩れてから火が消えます。命はロウソクのように、この世界に希望の光をもたらすことに使われるためにあるものです。小さくなって形が崩れたロウソクは、十字架の上のイエスさまを示します。ロウソクが自身の体を使い切って火が消えたとき、神さまは、立派で新しいロウソクを用意してくださいます。これは、復活の体にたとえることができるでしょう。命は、使うためにあるということです。

聖年の恵みをとおして、これからも私たちは、希望の巡礼者、希望の光を世にもたらす巡礼者として歩み続けるよう、神さまが導いておられることを心にとめて、祈りを捧げていきましょう。

【典礼部だより】さきどり典礼暦～諸聖人の祭日・死者の日～

この時期の街中はハロウィンの飾りつけ一色。お祭り騒ぎとしてのハロウィンはアイルランドの秋祭りがアメリカで変化したものですが、ハロウィン（Halloween）という単語自体は「諸聖人の祭日」（All Hallow's day）の夕べ（eve）に由来しますから、典礼暦と少しだけ関係がありますね。

４世紀ころから、教会は聖霊降臨後の最初の主日を全ての殉教者のための祭日としていました。９世紀に教皇グレゴリウスⅣ世がこれを11月１日に移し、全ての聖人の祭日としたのが「諸聖人の祭日」の起源です。

この日の第１朗読（黙示録7・2-4,9-14）では、『あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が』神様をたたえるシーンが描かれています。神様の御前にある諸聖人（とその交わりの中にある教会）の姿だと言っていいでしょう。ちなみに聖年公式賛歌『希望の巡礼者』で、わたしたちが「♪神のことばはともしび、すべての人を照らす」と歌う部分の原詞は、Ogni（オグニ） lingua（リングァ）, popolo（ポポロ） e（エ） nazione（ナツィオーネ） trova（トローヴァ） luce（ルーチェ） nella（ネッラ） tua（トゥア） Parola（パローラ）（あらゆる言葉・民族・国籍の人々が、あなたのみことばに光を見いだす）と、このシーンをリスペクトしたものです。

「諸聖人の祭日」の翌日、11月２日は「死者の日」です。教会は最初期から死者のために祈り、生きている人だけではなく帰天した人をも含む共同体を築いてきました。現在の形の「死者の日」は10世紀末、ベネディクト会の修道院で11月２日を帰天した信徒のための記念日としたことに始まります。

この日の第１朗読（知恵3・1-6,9）は、死者について『不滅への大いなる希望が彼らにはある』とし、第２朗読（ローマ8・31b-35,37-39）でも、何者も『神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない』と希望について語られます（この朗読の38・39節は2025年の通常聖年公布の大勅書（だいちょくしょ）『希望は欺（あざむ）かない』にも引用されています）。そしてこの希望は、この日の福音書朗読（ヨハネ6・37-40）の力強いみことばにつながっていきます。

わたしたちの教会の「わたしたち」は、いま生きていて、いつでも話すことができる信者どうしの「わたしたち」にとどまりません。それは『あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった』諸聖人との交わりの中にあり、帰天した人をも含む「わたしたち」です。「諸聖人の祭日」「死者の日」は、そのことを再発見する機会でもあります。典礼部／〇〇〇〇　監修：ルスニ神父・シスター今田

サグラダ・ファミリアへの記事掲載のご要望は、広報部（info@catholic-mito.com）まで。広報部／〇〇〇〇